

# けるくるーる

きょうはなにいろっ

こぎんとこぎんのある生活をたのしもう

11号

発行:こぎん刺し 絵糸

2016/3/2 発行

<http://kogin-eito.com/>



## モドコ・アレコレ

### ⑩石畳

四角四面と思いきや、意外に自由な「モドコ」。

糸の合間に生地を四角く抜くように刺す、石畳のモドコ。連続で刺し、広い面積で見ると、二色の正方形が規則正しく並びます。モダンな印象で、柄に入れるとよいアクセントになるモドコです。

\*\*\*

日本では同じ形、大きさの二色の図形を並べていく文様を「入れ替わり文様」と呼びます。三角形を並べれば「うろこ」文様。六角形ならば「亀甲」。そして正方形を使えば「石畳」。こぎんのモドコにも登場するものばかりです。石畳文の中でも「市松」は広く有名です。江戸時代中期の一七四一年、江戸の歌舞伎役者佐野川市松が、衣装の袴に当時の流行柄と

して使ったことが女性たちに人気を博し、以来「市松柄」と呼ばれ愛されてきました。市松人形はこの役者に似せたのだという説もあるとか。今も昔も女性ファンの熱意には脱帽です。

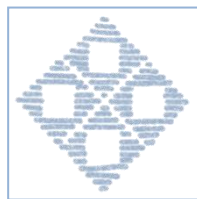
さらに時代をさかのぼると、もとは神社の敷石をモチーフとしたと伝わっています。「年中行事絵巻」などを紐解けば、平安時代にはすでに着物の地紋として使われていたことが記されています。小さな星型の抜きを入れた細かな石畳を「霞(あられ)」文様と呼んで、宮中職の人が着ていたそうです。

京都の桂離宮では、ふすまや床の間の柄として知られていて、今でも実際に訪れることができます。藍で染められた青と白が並ぶ、大ぶりの石畳文様はダイナミックの一言。自然と調和するよう計算された日本建築の中ではその規則性がひときわ目を引き、洗練

された美しさの一端を担っています。

\*\*\*

さて、こぎんのモドコに話を戻しましょう。こぎん刺しの柄の作り方に「連続刺し」と呼ばれるものがあります。一つのモドコを敷き詰めるように刺す方法です。並べ方はシンプルでも、刺し上がりはとても贅沢な仕上がりになります。この「石畳の連続」という刺し方をすると、モドコ一つでは分かりにくかった二色の正方形の並びが見えてきますよ。

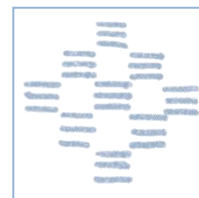


(上)石畳のモドコ (下)連続で刺すと……。

中央の正方形の他に、角の三角形が四つ集合して見えてくる正方形。まさに『こぎんマジック』。また隣り合うモドコどうしの境目は、地が抜かれて細いラインが格子状になります。

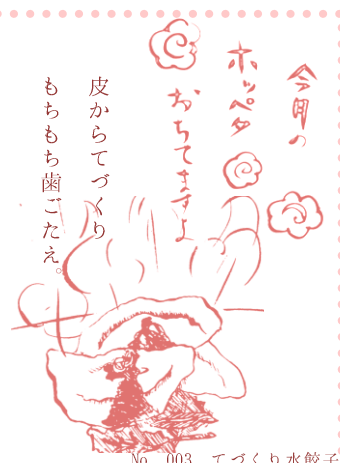
あえて重ねて並べるイメージで生地を四角く抜いても洒落た囲み柄になったり、「市松」より

しく小さな四角のみを交互に並べても可愛らしくなったり。江戸から時間を経た現代でもモダンと言えそうな、女性や若い人に好まれそうな印象ですね。



ザ・市松。

街の足元にはいろいろな石畳があふれています。どんな場所のどんな石畳か、いつの季節の風景か、そんなことが図案づくりの発想のもとになることもあります。こぎんの故郷・弘前の歩道にも、こぎん刺しのモドコが隠れていました。微妙な目数の違いで大きさを変えたり、一緒に並べるモドコとの組み合わせであそぶと、様々な風景が見えてきますよ。



## 三月の一句

種を植える時つて楽しいですよ。

木の实植え

新しきを待つ窓辺かな

(実)

寒空の下にも、温かな太陽を感じた日が増えてきた。ともすれば乾燥しがちなベランダに、緑が増えたら嬉しい。蒔いた木の实からは、どんな芽が出るだろう。新しい葉を想像して窓辺で過ごしながら春に思いをはせる。

## 季節のぜいたく

### ① つむじ風

寒くて背中を丸めて歩いていても、すぐそこに春。

寒さが少しずつつゆるむ頃、冬の間に路上に落ちた葉はずいぶん積もって厚みを増した。東京の雪

のない冬にもとくに慣れたが、乾燥した風は別だ。下ろした髪はぼうぼうと巻き上げられるし、埃っぽい冷たさは身体の芯が冷えてこまるから。

だがある日、出かけた先のコンクリートの道を歩いてみると目の端でちよろちよろと動くものがある。気になってそちらを探すと、直径三十センチほどの輪を描きながらすべるように動く木の葉の列だった。つむじ風だ。

丸まって欠けたものも平たく素直な形をしたものも、同じ方向を向いてするすると上手にすべっていく。気をつけて周りを見れば、その場所は風がうまい具合に集まるのか、いくつもそんな円形が道に散っていた。歩く人などお構いなしに気ままにくるるときにはふいに気配を消す感じが妙に生きものめいておかしみがあった。

あと一月もたてば、つむじ風は桜の花びらを巻きながら道に円を描くようになるだろう。そんなことを思いながら歩く春の初め。いろんなことが待ち遠しい季節だ。

## A tale of a tailor ~ある下町の仕立て屋さん③~ (前回)偶然見つけた町のワイシャツ屋さん。静かな店で見本帳を繰り生地は決め……。

襟の形、硬さ、着用感に前立てのつくり。メモをとる手はやはり少しふるえていた。しかし、慣れないこちらのどんな希望にも、老眼鏡の向こうから「できるよ」と自信あり気に目をかがやかせる。

やがてガコッとカウンターを上げて出てきた店主は、先程までとは別人のような身のこなしで採寸を始めた。衛星さながらに私の周囲をまわりながら、メジャーを動かす手は素早く、静かで正確だ。私はただ黙って立ってあればよかった。

あつと言う間に終えて「2週間かかりますからね」と納期を書き込んだカレンダーは先客たちの予定ですでに空白も少ない。私はすっかりシビレてしまった。

約束の日、ご主人が取り出してきたシャツは私の要望通り。彼の仕事をぶりを思いだしながら試しに着ると、やっぱりシヤンと背筋が伸びるような美しさがあった。(完)

著・庭野みのり

## 制作近況

新しい品を作る日々です。生地を探して歩き、デザインを考え、針を持つては出来を眺めながら調整を繰り返します。

この「眺める」作業が一番難しく楽しい。一つ一つフリーハンドで柄を作っていると、目立てをしてから刺し上がる間に徐々に柄のイメージも変化していきます。先を練りながら途中の様子を眺めるたび、糸とモドコに楽しまされる感覚です。

この春はストールとバッグにうちこんでいます。布地がキャンパスのようなもので、すべては柄次第。印象がひとつひとつ異なるように作ります。どんな人が持つてくれるのか、どんな洋服に合うだろうかと思いつめぐらして、少し入れては離して眺め、また刺して今度は鏡に映して眺め、とやっています。「ここだ！」という瞬間が来るまで少しづつ柄をそだてていく感じですよ。-----

## 《編集後記》

この時期はそわそわと、道行く犬の散歩姿も少し浮かれているような。今月より制作近況もちよこっとお届けしました。◎